＜フィリピン水害被害者支援活動を振り返って＞

永井佐江子 （看護師）

★現地到着

成田からマニラの空港に到着。フィリピンは初めて訪れる地である。周囲を見渡しても、どこに水害被害があるのだろうと疑問をもつ。人も時間も普通に流れているように感じられた。空港のホテル関係者は、私達が医療支援でこの国を訪れていることを知ると「私達のためにありがとう」と私達に告げた。たくさんの死者を出したこの被害について、フィリピンの国の方たちが心を痛めていることは確認するまでもなかった。

ホテル到着後、先発部隊の浅井医師も含めて被害状況・現地の方達の健康被害・今後の活動についてミーティングを開く。そこで話を聞いてもまだ実感に至らない状態であった。被害の状況を目のあたりにしたのは、実際の活動場所に出向いてからのことであった。

★被災地と避難所

翌日より活動を開始。たくさんの方が生活をしている雑然とした避難所を視察。被害を目の当たりにしたこの時フィリピンの水害被害が現実のものとなって実感された。プライベートが一切確保されないような環境、被災から約１０日間経過していたが住民の生活は混乱したままであることがうかがえた。避難所周囲には泥だらけの住宅、周囲を見渡せば遥か高い木や電線にビニール等のゴミが絡まっている状態。それは台風により、この地域の水位が非常に高い位置にまで達していたことを示すものであった。大人の身長以上にも高く水位は増し、住民はどれほどの恐怖を抱いたのかはかりしれない。

活動は毎日異なる場所で行われたため、さまざまな場所で同じような光景を目にすることとなった。どの避難所もたくさんの人々が居住するには無理のあるスペースであり、衛生状態は最悪なものであった。被害による精神的苦痛とその後続いている不憫な生活が、フィリピンの人々にどのような影響を与えているのかと考えると辛いものがあった。

★支援活動

マニラ首都圏保健局と協力し避難所や地域モバイル形式における診察を介助。毎回状況が異なるため、診察のコーディネート方法はさまざまであった。狭いスペースでの診察はとても窮屈である。たくさんの患者があふれかえるスペースで、いかに人の流れをスムーズにつくるかが重要視された。毎日メンバーの試行錯誤の工夫のもと診察が行われた。

患者の診察の流れは以下のようなものであった。ローカルスタッフによる問診→問診内容の確認を看護師が行い情報を追加、必要な患者は血圧・体温を測定→診察→薬を受け取り患者は帰宅。問診票は一連の流れの中で患者が管理、最終的にはその用紙に医師が処方を記入する。

看護師は個人にじっくり対応する者、全体を見渡しながら状態の悪い患者を選別する者と二手に別れて活動を行った。

★良かった点

高田看護師の作成した問診票が非常に優れていた。主訴として多数を占める症状と症状の発生がいつであったか書き込めるようになっているものであった。必要な項目が一目でわかるようになっており、それをチェックするだけであったため問診は簡潔的に進められた。たくさんの患者に一気に対応することが求められている状態であったため、その問診票は絶大な効果を発揮していた。

またタガログ語の症状ボードも現地で作成した。どの地域でも問診はローカルスタッフによって行われていたが、時として私達が担当することもあった。そのような時にはこのボードが意思疎通の役目を果たした。英語を話すことができない患者からも比較的容易に症状を聞き出すことができた。これは英語・タガログ語・イラストの書かれたボードであり、患者さんに指を指してもらうだけの一覧表となっていた。診察は良好なコミュニケーションのもと、一連の流れがスムーズに行われることが望ましい。このボードは言語による壁を軽減してくれるものであった。

これらの小さな工夫は問題を解決できる手立てとなっていた。

★難しく感じた点

今回特に浸水したままの地域においては、足の水虫や外傷を主訴に受診される患者さんが多くいた。汚染された水の中をザブザブとサンダル履きのまま歩きまわる方達、そうした光景をたくさん目にしてきた。そこではその行為が常識となっていた。教育的視点から足の清潔を呼びかけることの必要性も感じたが、診察状況や長期にわたって関わりをもつことができない事情からそれを行うことは困難であった。また、やむを得ない生活の状況と国の文化というものも結びつくことが考えられた。こういった関わりが行えなかったのは残念に思われた点である。

★マニラ首都圏保健局とのつながり

今回の活動は先発部隊が築いてくれたマニラ首都圏保健局とのつながりなくしては成り立たなかった。毎朝自分達をあたたかく迎えてくれ、活動場所の調整やスタッフの調整を行ってくれたマニラ首都圏保健局の方達に感謝している。

マニラ首都圏保健局で行われた対策会議の冒頭、台風で犠牲となった方達を悼みお祈りを捧げていたスタッフの方達の姿が今も頭に残っている。被災者の救援に力を尽くされていたスタッフの熱意と使命感には頭が下がる思いである。

★フィリピンの人々

各活動場所ではフィリピンの方達のあたたかい気持ちに助けられた。地元のボランティアの方達・医療スタッフの協力はありがたかった。診察スペースの準備中、避難所で生活している方が自ら進んで自分達の使用しているテーブルや椅子をきれいに拭いて提供してくれた方がいた。診察中は声をかけなくても、私達のやりやすいように列を整理してくれる方もいた。また私の身体を気遣って自分たちの大切なペットボトルの水を差しだし「ここは私に任せて、少し休んできなさい。」と笑顔で声をかけてくれる方もいた。日本語を話せる被災者の方は診察の通訳を自らかってでてくれた・・・ここには書ききれないほどのフィリピンの方たちの支えに自分は励まされた。自分達はここに精神的なケアも含めて医療を提供しに来ている。与えるだけでなく、自分達が与えられている大きなものに気付き胸が熱くなった。フィリピンの方達には、この状況を切り抜けてどうにかこれから頑張ってもらいたいと願うばかりだ。今回の活動がフィリピンの人々の元気を取り戻す少しのきっかけとなることを願って、フィリピンを後にした。

★初めて HuMA の派遣活動に参加して

このフィリピン水害被災者支援は、私の初めての HuMA の仕事であった。そのためアドバイスをいただきながら業務を遂行。今振り返ればとても貴重な経験をたくさんさせていただいた。目にするもの感じるもの全てが新鮮に感じられた。

現地に到着してミーティングを行っている際に、このミッションは自分達の手で全て作り上げていくものだということを知った時には驚いた。当初シナリオはすでに決められていて、その流れに自分は乗ればいいのだと安易な考えを抱きフィリピンに向かった。それがメンバーの話を聞いているうちに、自分が考えていたこととは違っていたことに気付いた。何か心が引き締まる思いであった。他のメンバー達は到着後すぐに仕事に取り組んでいた。確実に自分の把握しているコネクションを用いて情報を収集、このミッションに役に立てるような意見を出していた。自分の目の前で皆が全力を尽くしていた。

経験のない私はメンバーの支えに助けられた。現場で細かい指導をいただきながら仕事を行うことで「自分にもできることがある」ということを知った。自分の無力さに少々気持ちが沈むこともあったが「今はここで出来ることを頑張ってやるだけ」と自分に言い聞かせた。

十分なコミュニケーション能力・必要とされる人間性・さらなる医療知識・・・それらは今後の自分自身の課題である。しっかりと身につけていくことで次に生かしていきたいと思う。

今回のミッションでは上記のように自分に必要となる知識や技術について、たくさん気付かされた。これから必要とされるものをしっかり学んでいきたい。そして支えてくれたチームメンバーのように１つのミッションを作り上げていくことができる一員になりたいと思う。日本で広い視野で物事をみる力を養うことも大切であると感じた。

何の実績もない自分にチャンスをくれ支えてくださったスタッフの皆様、現地でたくさんのアドバイスをくれ支えてくれたチームメンバーの方に感謝しています。ありがとうございました。自分にとって未知の領域で活動できたフィリピンでの約２週間は私の人生の宝物です。